

土木学会選奨土木遺産の教育素材としての活用方法の検討

(社) 北海道開発技術センター 正会員 ○原口 征人
北海道教育大学教育学部 正会員 今 尚之

1. はじめに

土木学会選奨土木遺産の活用として土木学会北海道支部では見学会を企画し、実施している。平成20年度の第1回見学会について報告し、土木遺産の効用と見学ツアーの課題について考察する。

2. 土木遺産見学会の検討

(1) ツアーの構成

平成19年度土木学会北海道支部(坂本容支部長)では、総務幹事会の肝いりで土木遺産ツアーの検討を始めた。北海道の選奨土木遺産は17件(当時)で全道に散らばっており、全てを回るツアーは北海道が広大である故、不可能と判断された。このため、まずは遺産が集中する道南(函館地区)に絞って実施しようと決まった。検討結果が出たのが秋だったため、実施は翌春の20年度となった。

3つの選奨遺産(5箇所)を巡る2日間の旅で、1日のみでも参加できるようにし、参加費用はバス代を割った2,000円と安く押さえた。

(2) 参加者の募集

学会の支部活動のため、まずは学会員に対しチラシ配布やMLを用いて宣伝した。のちに支部幹事の働きで地元函館の新聞に取り上げてもらい、一般市民へ募集を拡げた。参加者は土木技術者を中心として総勢45名。このうち一般からの参加が2名あったのが心強かった。

3. 見学会の実施と説明等の状況

(1) 札幌本道 赤松並木(図1の①)

1日目(6/16(月))、昼過ぎにJR函館駅へ集合しバスで赤松並木へ移動した。並木は現在、函館道路事務所と市民ボランティア団体『赤松街道を愛する会』が維持活動をしている。その会長氏にご説明をいただいた。熱心かつ丁寧なお話で、最後のお別れでは参加者から拍手がわきおこった。並木がこのように見学されたのも初めてとのこと。

①札幌本道 赤松並木(1877年～)

わが国最初の西洋式馬車道『札幌本道』に、開通の翌年から植えられた、赤松を主体とする並木道。



②函館市の水道施設群(1889年, 1924年)

横浜に次いで完成した近代水道整備で、のちに水源確保のため日本初のバットレス形式「笹流ダム」が建設された。



③函館港改良施設群(1899年, 1903年)

広井勇博士が最初に手がけた港湾計画。石積みの「船入潤防波堤」と、「第1号乾ドック」が現役で利用される。



図1 函館市の選奨土木遺産

(2) 函館市の水道施設群(図1の②)

水道施設では、まずは取水口の「笹流ダム」でダムの圧倒的な存在感と造形美を体感し、函館市水道局の担当係長から、ダム設計者の技術者魂を示す逸話(コンクリート劣化と補修設計に関して)を聞かせていただいた。

次にバスは市内に向かい、元町配水池の見学。ここでも20代の若い担当者から説明をいただき、よく勉強されている、と参加者からも感心しきりだった。

(3) 函館港改良施設群(図1の③)

2日目(6/17(火))は“函館港改良工事記念碑”に現地集合し、歩いて港の施設を体感してもらった。広井勇博士の設計は防波堤のみならず、埋め立て地の都市計画まで含まれるためである。台場の石垣を再利用した防波堤から最新の漁港設備まで、函館港湾事務所長からご説明をいただいた。

キーワード 選奨土木遺産, 遺産ツアー, 見学会, 技術者教育, 生涯学習

連絡先 〒060-0051 北海道札幌市中央区南1東2-11 (社)北海道開発技術センター企画部 TEL 011-271-3029

表 1 参加者へのアンケートのうち自由記述欄の集計

- ① 今回の見学会のなかで、印象に残ったこと、感心したこと、役に立ったこと、気づきなどがありましたら教えてください。(21名回答・複数カウントあり)

6人	【遺産】函館水道施設群(笹流ダムなど)
5人	当時の技術者の技術力、行動力
4人	函館に土木遺産が多く、感動した
3人	遺産に感動した。保存を考えないといけない
2人	担当者の説明に感心した
1人	【遺産】赤松並木
1人	【遺産】港の施設(下水道のマンホールなど)
1人	一般の参加者があり良かった
1人	地元が函館なのでだいたい知っていた
1人	人数が多くなりバスが狭かった

ツアーはここから港湾地区を練り歩き、建築を含めた数々の歴史遺産を見学するルートを取った。途中、函館ドックを海側から眺め、東浜棧橋跡にて記念撮影し、第1回見学会は終了となった。

4. 参加者のアンケート調査による考察

(1) 身近な遺産を知ることが重要

地元函館からの参加者が語ったのは、昔から施設の存在は知っていたけど土木遺産として見たことはなく、今回のツアーで改めてよく知ることができ感動した、という声だった(表1の①)。“灯台もと暗し”であるが、多くの町でも同じ状況があるだろう。子供の時から親しんできた近所の建造物が「遺産」となるのは喜ばしく誇りとなることだろう。遠方から来た(マニアックな)人よりも地元で(一般に)受け止めてもらえるツアーにこそ、大きな効果が出てくる。

(2) 技術とその裏にある人間の力

今日まで残る遺産(特に現役のもの)は、そのこと自体が建設当時の技術の高さを実証している。そして事業を成功へ導いた人物も、実行力、決断力、リーダーとしての素養をもつ大人物で、これにも感動する。技術者が最大限の力を発揮したプロジェクトだからこそ、知るほどに味わい深いストーリーに出会える。その物語を現地で聞くことが、土木という行為の価値を参加者に印象づかせることにつながっている(表1①の笹流ダム等)。土木史を座学で聞くのとは違い、現地だからこそ感じる強い感動がツアーにはある。

(3) 管理者の誇りを刺激するツアー

土木遺産を維持している管理者にとっても、この

- ② 今後の土木遺産見学会についてご要望、ご提案がございましたらお教えてください。(17名回答・複数カウントあり)

6人	一般市民の参加
2人	若い人(学生、若手)の参加
2人	とにかく継続してほしい
2人	マイクが不調で聞き取りづらかった
1人	参加者同士の交流
1人	バスを使った長距離の遺産ツアー
1人	失われた技術遺産を見学
1人	午前に講義、午後に現地見学、という方式
1人	徒歩は少ない方がいい
1人	飲み物が欲しかった

ようなツアーで説明を担当することは、仕事に対する誇りを新たに作る良いイベントとなる。参加者も管理者だからこそ知っている目から鱗の知識や、当時の裏話に感心したり、感動したりした。そんなやりとりから、土木遺産を支える担当者と市民の共通意識がつくられていくのだといえる。

5. 今後の課題

(1) 一般市民の参加

アンケートでは「こういったツアーは素晴らしい。」「ぜひ続けて欲しい。」という声が多く、加えて一般市民が多く参加するようなツアーにして欲しい、との要望が強くあがった(表1の②)。しかし参加募集時には人が集まりにくい状況もあり、特に若年層(学生、若手)が難しい。「土木遺産」という名前が堅苦しいことなど理由は色々あり、そのようなパッケージングの向上に加えて旅行会社との提携等、販路の拡大にも今後つなげていきたい。ダムや工場、廃墟等を巡るツアーに関心が高まる時流に加わったり、地元の生涯学習の講座協力等が考えられる。

(2) 土木遺産ツアーの意義

土木遺産ツアーはこれまで示してきたように、土木の文化を作り出していくことに役立つ。市民は生活と土木がつながっていることを認識し、地域を形づくる歴史の一部なのだとして理解する。土木技術者も、担当する構造物と土木遺産とを重ね合わせて自身の仕事のスタンスを見つめ直し、土木という仕事への誇りを見いだしていくのである。

市民にとっても技術者にとっても、土木に向き合う正しい態度を学んでいく行為が、土木遺産ツアーという現地学習なのである。